
平成12年10月14日(土)・29日(日)

第二八二回 史跡めぐり 資料

北条時宗の鎌倉

越谷市郷土研究会

○政子

源頼朝の妻。

米西を迎え、寿福寺を建てる。

○時政

源頼朝の妻となった政子の父。伊豆・狩野川流域の豪族。

初代執権。(1203)~(1205)

○義時

政子の弟。

②代執権。(1205)~(1224)

○時頼

義時の曾孫。

⑤代執権。(1246)~(1256)

父・時氏と母・安達景盛の娘(松下禪尼)との子。

三浦氏(泰村・光村)一族を滅ぼす。

蘭深道隆を迎え、建長寺を建てる。

明月院の地に最明寺を建てる。のち、息子時宗が禅興寺として再興。

墓はこの明月院の中にあり。謡曲「鉢の木」でも知られる。

○時宗

時頼の息子。

⑧代執権。(1268)~(1284)

18才で執権となり、文永11(1274)年と弘安4(1281)年の2度の元寇来の難局をのりきった。日蓮を処刑しようとした。

無学祖元を迎え、円覚寺を建てる。

33才で没す。廟所は円覚寺内の仏日庵。

○覚山尼

時宗の妻。弘安7(1284)年、時宗の臨終のとき出家した。安達泰

盛の妹。翌弘安8(1285)年には泰盛など安達家の滅亡にあう

東慶寺の開山。駆込み寺法をその子・貞時に認めさせた。

○貞時

時宗の息子。

⑨代執権。(1284)~(1301)

東慶寺の駆込み寺法を認めた。円覚寺の鐘を寄進。

○宗政

時頼の息子(三男)。

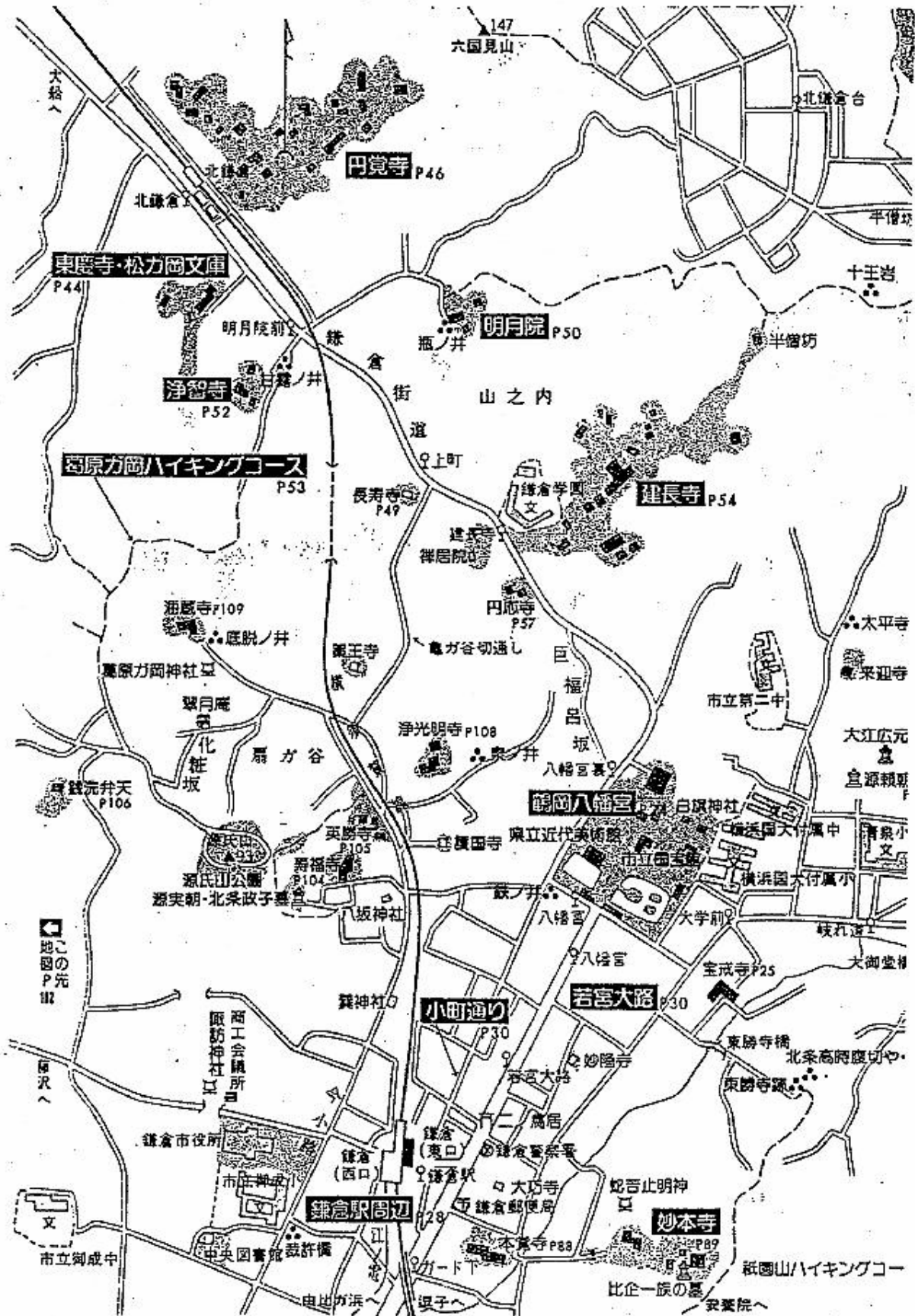
夫人は宗政の死後、彼と息子・師時を開基として浄智寺を建てる。

○師時

宗政の子。

⑩代執権。(1301)~(1311)

北条氏は時宗の孫の高時の時に滅亡。執権は16代・守時まで。



この先
地図の
P 100

開山覚山尼は秋田城あきたのすけ介安達義景あだちのよしかげの女、母は北条時房ときむねの女、時房は尼將軍政子の弟、いずれも鎌倉の名門である。建長四年（一二五二）七月四日、鎌倉長谷甘繩の安達邸で生まれた。『吾妻鏡』には、この日の条に、

天晴、午刻秋田城介義景妻、女子平産云々、号堀内殿者也。

とある。日本女性史上の代表的人物となる覚山尼こと堀内殿の誕生を祝うがごとき晴天であった。のちに夫となる時宗は、この前年五月十五日に同じこの安達の邸で生まれたのである。

堀内殿には兄泰盛以下八男三女の兄弟姉妹があるが、この翌年父が逝き、兄泰盛が城介となり父代りとなる。『徒然草』にも出てくる障子の切り貼りをして、世を治むる道、儉約を本とすと、わが子時頼に教えた松下禅尼は安達義景の妹であるから、堀内殿には叔母であり、後に時宗夫人となつては外祖母になる人であるが、同じ甘繩の邸内に住んでいたから、少女時代に訓育感化をうけたことであらう。

兼好は松下禅尼を「女性なれども聖人の心に通へり。天下を保つ程の人を子にて持たれける、誠に、ただ人にはあらざりけるとぞ」と非凡の人物として書き残したが、同じ『徒然草』のつづきの段に、兄泰盛の逸話をのべて、乗馬まらひの双なき名人で道を知る人物だとほめてゐる。

『明恵伝記』によれば、承久の変の時、明恵の居った梅尾高山寺の山中に官軍の将士が多く逃げ入つたというので、城介義景が山中にはいつて探索し、明恵をとらえて六波羅の北条泰時の前につれて来た。この時、明恵は、

「この山は殺生禁断の地であり、鳥でも獣でもここへかくれて命を続ける。さればこの山へ逃げこんだ兵士を追い出すわけにはいかぬ、わが身がどうなるうとも」

と押返したので、泰時感涙を催おし、これより深く明恵に帰依したという。これも有名な話であるが、この時、義景は十一、二歳の少年であるから、これは父の景盛の誤りであらう。高山寺

にしる、高野山にしる、寺は一種の治外法権の特権があり、軍兵が走入したこともあるのである。この明恵の話を堀内殿は兄から聞いたことであろう。これは後に、駈入寺を作る彼女の生涯の上に大きな影響をおよぼすと考えてよい。

建長五年六月三日、堀内殿が満一歳にもならぬ前に父義景は四十四歳で死んだ。この年十一月に建長寺が落慶した。この寺は時頼の本願で、建長三年十一月初工、開山は宋から渡来の蘭溪道隆である。

時頼はこの三年後に執権を長時にゆずり、最明寺に出家した。時に三十歳、出家しても鎌倉の最高の実力者として政治はみていた。この時、相模太郎正寿丸六歳、翌年元服して時宗と称した。弘長元年（一二六一）の四月二十三日、時宗十一歳、堀内殿十歳で結婚、安達邸から時宗邸に移った。早婚であり、近親結婚であるが、当時は珍らしくない。堀内殿から見れば時頼は従兄弟であるが、ここで舅と嫁の間柄となる。北条家の若君、後の執権となるべき時宗の妻として、その家柄、その人物最も適格の者として松下禅尼の推挙したものである。時宗が極楽寺の馬場で小笠懸の妙技を見せ、將軍宗尊親王の御感に預かり、時頼は、わが家をうけつぐべき器であると大いに喜んだ話は、この結婚の翌々日のことである。この時、時宗は諸人の感声動揺を尻目に、そのまま馬を飛ばして邸に帰ったとある。十歳の新夫人堀内殿は、どんな表情でこれを迎えたことか。まぶたに浮かぶようなほほえましい風景である。

高柳光寿博士は、『吾妻鏡』では時頼の家を御所といい、時宗を若君と記しているが、これは將軍家の待遇であるから、時頼は実質的には將軍であったといえるし、北条氏の勢力は時頼に至って極盛に達したというべしと論ぜられる（『鎌倉市史総説』）。

この時宗の新婚時代は北条家の最高、最良、正に最明のころであったといえよう。これより三年後の弘長三年十一月二十二日に時頼は、最明寺の北亭で、法体にて、袈裟をかけ、繩床に上って坐禪をして、遺偈を唱えて入定した。この即身成仏の瑞相をおがもうと道俗貴賤群をなしたと

『吾妻鏡』は伝え、禪の本でも、「末後一機超仏越祖」と賞讃し、遠く海を越えて宋国にまで伝唱され、円覚寺の開山無学祖元禪師が日本へ渡来される動機ともなったのである。

時頼の死は、当時の鎌倉人には大きなショックであり、平生恩顧の武士は、この時多く出家した。その中の城時盛、関戸丹後守頼景らは時宗夫人の兄である。若い時宗夫妻にも深い哀傷であったろうが、同時にまた、その末後の牢関を透り、寂然不動の臨終の有様は、兩人の禪への信仰を深め、大休正念や無学祖元らの名僧が来朝し、円覚寺をはじめ多くの禪寺が造営され禪宗興隆の根源ともなった。

文永元年（一二六四）八月に、連署政村が執権となり、時宗が連署となり、十一月時宗の兄時輔は六波羅探題となり、京都に赴任した。

文永三年六月、時宗は執権政村および一族の評定衆金沢実時、同じく評定衆で夫人の兄泰盛の三人だけを山ノ内の別邸に招いて密談し、その後二十五歳の將軍宗尊親王を廃し、三歳の惟康王を立てる。この別邸は山内殿といって最明寺の別業をさす。ここの東側の新亭は山内泉邸とも東亭ともいうが、明月谷の川に臨んだ亭で、宗尊親王も納涼二泊されたこともある。

文永五年三月、時宗が執権となり、政村が連署となった。このとき時宗はわずかに十八歳であったが、彼は北条家の嫡男得宗である。この年一月、高麗の使者が来て蒙古・高麗の国書を差出した。そこで得宗の時宗を主脳とし、一致協力して蒙古に対決しようとの国防上、この役職の交替となったのであろうが、これより文永・弘安の蒙古襲来は時宗一生の大事件となる。

文永十一年（一二七四）十月、蒙古兵三万、船艦九百艘、対馬・岩岐を侵し、筑前に上陸。二十日の夜暴風が起り、蒙古の船艦海没二百余、溺死一万三千五百人、敵は大敗して逃げ去った。弘安四年（一二八二）五月、蒙古軍四万人、船艦九百艘で再び来襲、六月さらに十万の大軍、三千五百艘の船艦来襲、筑前、肥前の海は敵船で充満したが、わが軍よく防戦し、閏七月一日の大

暴風により敵の兵船ほとんど海没、溺死無数、わが軍大勝という次第、ここで元寇のことを説明する要もないから略すが、時宗はこの来寇に際して、その願文に、「一箭を施さずして四海安和」と書いたように、和平解決せんとしたが、ついに敵の来襲となり、干戈を交えざるをえぬこととなった。幸いにわが将兵の勇戦と颯風のおかげで、わが国土は元軍の馬蹄に蹂躪されず、玄海灘月清く静かな日本の朝を迎えることができたが、執権就任以来十五年の長きにわたって、一生この国難に対決せねばならなかった時宗の生涯は、思いやるだに胸痛むものがある。

これより先、日蓮は『立正安国論』を著わして時頼にささげたが、彼は黙殺した。文永五年、蒙古の来状を聞いて日蓮は時宗に書状を送り、建長寺の蘭溪、極楽寺の忍性にも書状を与えて挑戦したが、誰も返答しない。文永八年六月、幕府は忍性に雨を祈らせた。これを日蓮は猛烈にやじった。ついに九月十二日、竜ノ口で首の座に引据えられた。この時、刀が折れたとか、奇蹟があったとかで、日蓮宗では「竜ノ口の御法難」と称するほど有名な事件であるが、事實は時宗夫人の懐妊のゆえに、俄かに死罪を赦されて佐渡に流罪となったのである。

「なにとなくとも頸を切らるべかりけるが、守殿（相模守時宗）の御だい所の御懐妊なればしばらく切られず」（種々御振舞御書）

と、日蓮自身がのべているとおり確かなことで、これについては辻善之助博士も『日本仏教史』に詳論され、すでに学界でも定説となっている。ともかく時宗夫人のお蔭で、日蓮はあやうき命を助けられたことになる。

この年十二月二日に、貞時が生まれた。夫人二十歳の時である。

翌文永九年に「二月騒動」があつて、側室の子ながら時宗の兄時輔が六波羅で殺された。時輔時に二十五歳。貞時の生まれたことは、時宗夫妻には慶事であつたが、時輔一味には凶事となつた。この事件は若い時宗夫妻には一大試煉であつたらう。が、それにもましての苦難は蒙古襲来であつた。

これより前、弘安元年（一二七八）建長寺の蘭溪がなくなったので、時宗は徳詮・宗英の二僧を中国に派遣して名僧を招来する。その時の招請状は円覚寺に現存する。これを読んで来朝されたのが無学祖元、この人はかつて元の兵禍を避けて雁山の能仁寺に居た時、元兵が白刃を揮ってせまったが、泰然として、臨劍頌りんけんのかぶを吟じ、敵兵退散したという話のある有名な高僧である。

弘安二年六月、太宰府に着き、八月鎌倉に入り、時宗は弟子の礼をとり、建長寺の住持に任じ、熱心に参禅した。元軍襲来の時、「莫妄想」の一語で、時宗の決断力をつけた話も有名である。時宗は勇猛心を起こし、金剛經・円覚經を血書し日本国土の安泰を祈願し、その時、無学は、一字一画ことごとく神兵となって勝利を得ると供養の法話をのべている。

弘安の役の翌弘安五年（一二八二）十二月、時宗は円覚寺を建立し、無学を開山とし落慶法要を行なった。時宗はさらに地藏一千体を造って戦歿者の冥福を祈ったが、その時の無学の語、

「前歳及び往古、此軍及び他軍、戦死と溺水と万衆無帰の魂、唯願くは速かに救拔し、皆まさ
に苦海を超えんことを。法界了として差なく、冤親悉く平等」（『仏光録』原漢文）

敵味方といわず、此軍及び他軍という表現といい、これはなみなみならぬ尊い文字であり、尊い思想である。時宗は翌年には金光明經を書写して戦死者の供養をしたりしたが、弘安七年三月末に病となり、執権邸から山内の別邸に移り、夫人をはじめ一門、万民回春を祈ったが、二十年來の国難の重担、一生の心血を護国に注ぎ尽くして、四月四日、三十四歳の若さで死んだ。この時、無学に請うて落髮付衣、法光寺殿道果と安名され、この時夫人も共に落髮付衣、覚山志道と安名された。

時宗は「山内殿」といわれ、山ノ内に住んでいたと（市史総説、一三二頁）いう。また「梅峯」という号で詩も作つたらしい。父時頼にならって最明寺の別邸で坐禅し、遺偈を書いて長逝したのである。

この時、出家するもの夫人をはじめ一族従者三十四人、夫人の兄泰盛もこの時出家し、覚真なる法名となっている。全国の殺生を禁ぜられる等、朝野をあげての悲歎であった。円覚寺の奥に葬られ、その上に祠堂が建立された。仏日庵の開基廟がこれである。

時宗を「山内殿」といい、また貞時夫人は「山内禅尼」という（成松保について、貫達人）。こういうことより推察すると、時宗夫人の「堀内殿」というのは、山内殿の中に堀をめぐらした邸宅があつてそれをいったのか。葉山町に堀内ほりうちという所があるが、それと関係あるか、未詳。

時宗夫人出家して覚山志道尼となり、志道尼は時宗と死別の翌弘安八年（二二八五）に、東慶寺を開創した。このころまでに北鎌倉には建長、円覚、浄智、禅興、長勝等の禅寺が続々建立される。時宗夫妻が住みなれた山内別邸、修禅の道場であり、臨終の場所であつた最明寺より指呼の所、歩いて僅か数分のこの松ヶ岡、前方明月山頂より月の上るを仰ぐ松ヶ岡、覚山禅尼がこの地を相して、その後半生を托すべき退蔵の庵を結ぶには実に恰好の所であつた。この松ヶ岡の上からは、なつかしの山内別邸も泉亭も目の下に臨まれるのである。

- 1184 寿永3 頼朝、★大河土御厨を勝館に寄進。一の谷で平家敗る
- 1192 建久3 頼朝、鎌倉幕府をひらく
- 1199 正治1 頼朝没す
- 1200 正治2 寿福寺創建
- 1203 建仁3 北条時政、執権となる 1205 執権義時
- 1227 嘉禄3 ★江南町・全国最古の板碑 1224 執権泰時
- 1245 寛元3 ★慈光寺梵鐘（物部重光） 1242 執権経時
- 1246 寛元4 蘭溪道隆来日 1246 執権時頼
- 1249 建長元 建長寺創建
★越谷市・建長板碑
- 1251 建長3 円応寺・初江王像 時宗生まれる
- 1255 建長7 建長寺梵鐘（物部重光） 1256 執権長時
- 1263 弘長3 時頼没す
- 1268 文永5 時宗執権に。元使来たる 1264 執権政村
- 1274 文永11 文永の役 1268 執権時宗
- 1278 弘安元 蘭溪道隆没す
- 1279 弘安2 無学祖元来日
- 1281 弘安4 弘安の役
- 1282 弘安5 円覚寺創建。日蓮没す
- 1283 弘安6 浄智寺創建 1284 執権貞時
- 1284 弘安7 時宗没す
- 1285 弘安8 東慶寺創建
- 1301 正安3 円覚寺梵鐘（物部国光） 1301 執権師時
- (1311 執権宗宣 1311 熙時 1315 基時 1315 高時
- 1326 貞顕 1326 守時 1333 鎌倉幕府滅ぶ)
- 1354 文和3 ★越谷市東方の板碑
- 1394 応永元 上杉憲方没す

◎第282回 史跡めぐり 北条時宗の鎌倉

平成12年10月14日(土)・29日(日) 集合 午前7時50分 JR南越谷駅前
 コース 南越谷駅＝(武蔵野線)＝南浦和駅＝(京浜東北線)＝東京駅＝
 (東海道線)＝戸塚駅＝(横須賀線)＝北鎌倉駅…円覚寺…東慶
 寺…浄智寺…明月院<昼食>…建長寺…円応寺…鶴岡八幡宮…卯
 之助力石…小町通り自由散策…鎌倉駅(集合・午後3時50分)
 ＝(利根川)＝北朝霞駅＝(武蔵野線)＝南越谷駅 <解散>

参加費 5,000円 案内者 幹事長・宮川進

円覚寺

開基北条時宗
開山無学祖元

山ノ内にある。瑞鹿山円覚興聖禪寺。開基は北条時宗、開山は無学祖元である。臨濟宗円覚寺派本山。

開基の北条時宗については改めて述べるにも及ぶまい。

祖元は無学師
祖元の法嗣師

開山の無学祖元は字を于元という。無学はその号である。無学師範の法を嗣ぎ、又石溪心月・龍溪広
聞・唐鑑智愚を訪い、ついで詣寺に遷住した。徳祐元年(三三三)に蒙古軍が南下し、無学は兵禍を避けて
温州能仁寺にいた。翌年元兵が寺に侵入して寺衆みな逃げ隠れたとき、無学はとどまっていた。
元兵が祖元に刀を突きつけてせまってきたとき、自若として「乾坤無地車箱節、喜得人空法亦空、珍重六元
三尺鐵、電光影裏斬春風」という偈を説いたので、元兵はこれに感じて危害を加えずに去ったという話
はよく知られている。

元兵祖元に危
害を加えず

その頃(弘安元年、三三三)日本では關渡道隆が寂して建長寺の住持が空席となった。そこで時宗は弘安
元年十二月關渡の弟子無及徳監・宗英の二人を宋に派遣して、名僧を招聘せしめた(円覚寺文書、北条時
宗書状、史料編二一四)。當時幕府が迎えたいと思っていた人は天童山の「深溪」であったという。この
人は無准師範の法嗣であるが、すでに八〇歳に達していたので、代りに首座の無学祖元を派遣すること
になった。

北条時宗宋に
名僧をしようと

祖元は弘安三年(三三三)六月に太宰府に着き、八月に鎌倉に入った。時宗は弟子の礼を具えて之を迎え、
建長寺に入らした。(史料編二一五)祖元時に五四歳、時宗二九歳であった。祖元はすでに在宋のと
きから、法安である古訓によって日本のこと、特に時宗の臨終の時の事などを聞き及んでいたため、
東渡を期していたという。

祖元鎌倉につ
いて建長寺に
入る

時宗は弘安三年(三三三)六月に太宰府に着き、八月に鎌倉に入った。時宗は弟子の礼を具えて之を迎え、
建長寺に入らした。(史料編二一五)祖元時に五四歳、時宗二九歳であった。祖元はすでに在宋のと
きから、法安である古訓によって日本のこと、特に時宗の臨終の時の事などを聞き及んでいたため、
東渡を期していたという。

時宗、祖元に
参ず時宗さま
に大体正念に
参り即心即仏
・非心非仏の
公案を得

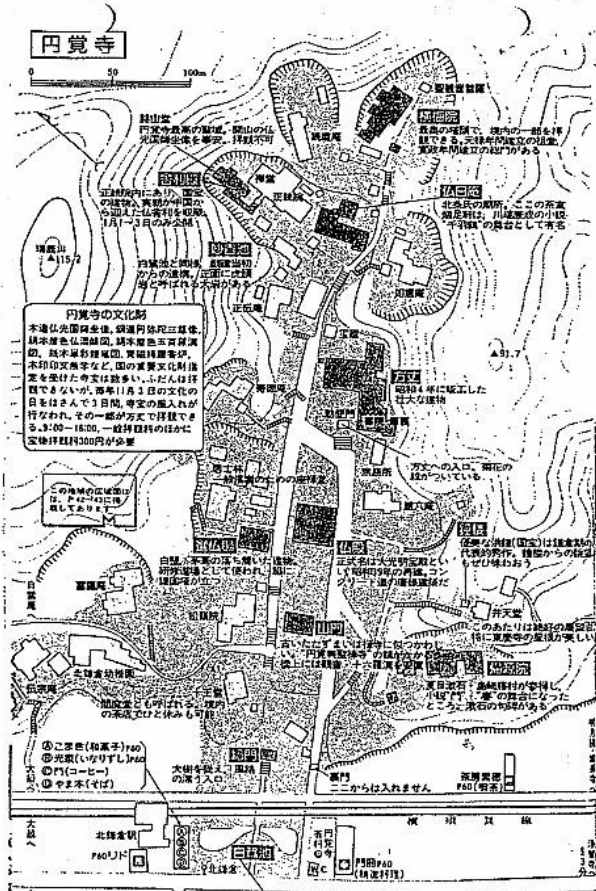
時宗は弘安三年(三三三)六月に太宰府に着き、八月に鎌倉に入った。時宗は弟子の礼を具えて之を迎え、
建長寺に入らした。(史料編二一五)祖元時に五四歳、時宗二九歳であった。祖元はすでに在宋のと
きから、法安である古訓によって日本のこと、特に時宗の臨終の時の事などを聞き及んでいたため、
東渡を期していたという。

弘安五年十二
月円覚寺供養
を行

さて円覚寺は弘安の役の翌年弘安五年(三三三)十二月八日に供養が行われた。

円覚寺開教に
まつわる諸伝

これよりさき、弘安元年(三三三)に時宗は道隆を開山として一寺を建立しようとし、道隆と共にその土地を
物したが、いまの円覚寺の地で道隆は一処を指してここがいいではないかといふので、ここに伽藍を入れてその地
を下して焼た。これらから起工して地を穿った地、中から石蔵がでてきた。みるとその中に円覚が納めてあ
った。寺名はこれより起つたといふ。(「建長寺宗代記」)「永朝高僧伝」(「西山略記」)又開堂の日、白鹿の
群が衆と共に說法を聴聞した。そこで山号を瑞鹿山としたといふ。(「元亨釈書」)また「元亨釈書」には
祖元在宋中鶴岡八幡宮の神が祖元にはばあらわれて来朝を乞うたか、地がどうしたとかいふ話を伝えてい
る。また鎌門前左右にある自然池は、八幡大神が白鷺と化し、道案内をしてこの池にとまったからだとい
う。これらはすべて大寺社の開教にまつわる共通の奇譚の一であるが、円覚寺も亦こうした奇譚をもつてそ
のはじめを飾ることにおいて、例外ではなかったわけである。



○舍利殿
室町時代に太平寺という尼寺から移されてきた。
三代将軍・源実朝が宋から分けてもらったという伝説があるといふ。日本最古の唐様建築で国宝である。
○山門の額「円覚興聖禪寺」は伏見上皇の親筆。
○仏日庵
北条時宗は文永一一(一二七四)年の元軍来襲のとき、二三才。弘安四(一二八一)年の再度の来襲時には三〇才。精神的負担が身体をむしばんだのか、三三才で没その廟所が仏日庵である。



無學祖元像——中国の名尊宿を招聘したいと考えていた北条時宗は、無學の高尼を考へ、環溪惟一に白羽の矢を立てた。しかし環溪は高尼のため法弟無學祖元を推薦した。来朝した無學は北条一門に切実な教化を加え、彼らの精神的支柱となった。

無學祖元

無學祖元が来朝したのは弘安二年（一二七九）である。環溪なきあと、中国の名尊宿を招聘したいと考えていた北条時宗は、環溪の遺弟無及徳詮と傑翁宗英を中国に派遣した。

「臥雲日件録」によればこのとき招聘使の意中にあつたのは無準師範の弟子環溪惟一であつたらしい。しかしすでに八〇歳に達した環溪は老齢のゆえをもつて固辞し、法弟で環溪会下の首座をつとめる無學を推薦したのである。無學は四四歳にして台州真如寺の住持

を七年間つとめおわつて、このとき五四歳になつてゐた。彼は環溪の大衆教化を賞けるために首座の位にいたけれども、日本僧と深い交わりを結んではいなかつたらしい。しかし時頼が臨終に際して法服を着、毅然として坐禪の姿のまま入寂した話や、日本が仏法の盛大であることなどは聞き知つていたらしく、環溪の指名をうけるとこれに応じた。無學は永年無準のもとに研鑽をつみ、無準はその悟境を了としていたらしいが、いま一步のところ印可をうけることができぬうちに無準の死にいたつてしまつた。そこで来朝が決定すると環溪はいまはなき無準に代わつて法衣を付与し、禪師からの印可の毅然たることを証明した。

こうして来日した無學はただちに鎌倉に下向し、八月二日建長寺第五世住持に就任した。

時宗は無學に日夜参禅し、ときには無及徳詮を使つて無學の指示を仰いだ。問答は通訳を介して行われたらしく、時宗にかわつて通訳が無學から接化の打棒を加えられている。時頼に面

罵痛棒を加えた兀庵に比べると興味深い。

弘安四年、蒙古が再び攻めてきた。時宗は國家の安泰と万民の保全を祈つて金剛經・円覚經などを血書し、無學に座説法を請うた。

蒙古に国土を奪われた宋のひと無學は、時宗の危機に深い同情を示し、説法を行っている。

蒙古の米襲がさしたる被害をもたらさずにおわると、世上には安堵の気がみなぎつた。

そこで、北条氏黒代一寺ずつ開立する慣例に従い、蒙古合戦における彼我の戦没者の菩提を弔うため、新たに禅院を建立しようという氣運がわきおこつてきた。それが円覚寺の開創となつた。円覚經・華嚴經を重んじた無學の意に従い、丈六金色の毘盧舍那佛像を安置し、その他の諸像や伽藍の配置にも華嚴世界を現前する工夫がなされ、枝谷の地形をうまく利用して天童寺に典型的な階段状の境内構成を用いた。

梵鐘 一口

円覚寺(鎌倉)

総高二二六・〇五 口径一四二・〇五
鎌倉時代(一二三〇)
昭和二十八年十一月指定

建長寺の梵鐘と並び称される鎌倉時代の代表的梵鐘であるが、総高はこれを凌ぐ大きさである。

鐘身はふくらみが少なく長目である。竜頭は大きく口を開き、鬘を逆立てた雄壮な竜首上に周圍を連珠文帯と球形の珠で飾った火焰宝珠が安置される。笠形は低く、肩にふくらみをもたせている。乳は半球形の茸形のを各区六段六列に配している。上帯は飛雲文、下帯は連続唐草文を鑄出している。撞座は八葉複弁の蓮華文で八花形の子房に九個の蓮子をもち周圍に蕊をめぐらす見事なものである。撞座の位置は比較的高めで、竜頭の鼻先の方に据えている。

池の間四区にわたって陰刻されている銘文は第二区と第四区の大文字が双鉤体(籠字)で表わされており、堂々として雄健な書風は、この大鐘にふさわしい見事なものである。

この銘文によって、この梵鐘は円覚寺を開創した北条時宗の子、北条氏第九代の執権であった貞時が大檀那となり、寄捨助縁惣信一千五百人と共に寄進したもので撰文は西澗子疊、鑄物師は物部国光で、正安三年(一二三〇)八月に鑄造され八月十七日巳時に撞き初めたことが知られる。

鐘銘中に鑄造の日を記す例は珍しくないが、鐘樓に懸け、撞き初めた日まで記載する例は稀れである。また鑄物師の物部国光は物部一族の中でも秀れたもので、作品も多い。

(中野政樹)

梵鐘 一口

建長寺(鎌倉)

総高二二〇・〇五 口径一二五・五五
鎌倉時代(一二五五)
昭和二十八年十一月指定

網鑄製。非常に大形の梵鐘で、円覚寺鐘と共に関東梵鐘の代表作といわれるものである。

高さにして口径のやや大きい、裾広がりの堂々たる形姿をもつ鐘である。竜頭の形状は鬘の先端を鋭く立てる勇猛な竜首に宝珠が置かれている。笠形は低く、上面を広く水平にして周圍に刺りをつけている。乳の間の丈が短く、池の間の丈が長く、乳は円柱状の突起で、五段七列に配している。上帯は四方に飛雲文を、下帯には四方に葉状唐草文を練条に鑄出している。駒の爪は三条の紐からなる。撞座は八葉複弁蓮華文で、子房に十七個の蓮子をおき、周圍に芯を表わしている。撞座の位置は下から三分の一程のところ、やや高めであるが、竜頭と撞座の関係は奈良時代の鐘と異なり、竜頭の鼻先に撞座がつく鎌倉時代以後、広く盛行する形式のもので、時代の特色をよく示している。

池の間二区には鑄出の鐘銘があり、これによって、大檀那は北条時頼、撰文と書は關溪道隆、鑄工は鎌倉時代鑄物師筆頭の物部一族の初代、物部重光で、建長七年(一二五五)に造られたことが知られる。

鎌倉時代の代表的な鐘であるが、随所に復古的な意匠がみられる。銘の書体が鑄出銘であることは注目されよう。

(中野政樹)

松岡山東慶寺、山ノ内の街道をへだてて内院寺と向い、あやの丘の中腹にある。東側の丘をへだてて淨智寺と接して隣り合っている。寺号のうち、移持は遠藤大師の弟子總持尼に因んで、禪の尼寺の意を含めた名であるという。臨濟宗内院寺派に属する。

当寺については東慶寺法願寺編纂委員井上柳定師の「誓入寺」(昭和三十年小山書房発行)の裏がらつて詳しいので、以下の記述もこれに拠る所が大きい。

開基北条貞時
開山覚山尼と伝う

開基は北条貞時、開山は覚山志道尼と伝える。覚山尼は北条時宗の夫人で安達藤原の女である。

覚山尼は安達藤原の山内氏、夫時宗の寵姫の寵姫

覚山尼は弘安八年(二二〇)霜月騒動でほろびた安達藤原の妹である。覚山尼は弘安七年夫時宗の臨終の際、時宗が祖元を導師として落髪したとき共に落髪付衣、覚山志道大師と安名した。翌年には泰盛・宗景・時長・宗頼等実家安達家の滅亡に遭っている。「仏光録」によると時宗の三年忌に自ら華嚴経を書して供養している。

二

二十世天秀法
天秀尼の息女

当寺二十世天秀法泰尼は豊臣秀頼の女である。元和元年大坂落城によって秀頼は死に、七歳の幼女は捕えられた。「山経書」によれば「大坂一乱之後、天僧院様(千徳)御養女に被る成、元和元年推現様依上意当山江入齋院、十九世成山和尚御附弟に被る成」とある。法泰尼は正保元年(寛永二十一年、二二四)に示寂したが、その前から隠居していたので天秀法泰尼は寛永年間から二十世として活躍する。

山経書「や」(日記)によると法泰尼入寺に際し家康から希望を問われたのに対し、開山よりの寺法

加藤明成の事
加藤明成の事

断絶なく永く相立てば、これにすぎた願はないと答へ、これがゆるぎされて、江戸時代を通じて寺法が維持されたのだという。正保二年示寂というから、元和元年に入齋であった法泰尼に、こんな(後)孫はできそうもないし、翌年には家康は死んでいるので、この話も事実かどうか疑わざるを得ない。禅定師は養母天寿(賢)御方用(院)千熊等のとりなしがあったらうといわれている。(誓入寺)

加藤明成の事
加藤明成の事

けれども次の一件は寛永年間(明成)に当寺願入寺法が存在していたことを物證つて余りがある。すなわち会津城主加藤明成の事件である。加藤明成は賤岳七木槍の一人孫六嘉明の子、寛永八年会津若松四十万石を継いだが、甚だ不肖であった。老臣主水忠の忠告もきかず主従不和となり、遂に主水は出府して主君を訴えたので、明成は立腹し家光に乞うて、高野山に入った主水を騙つてこれを殺し、ついで東慶寺に入った主水の妻子を捕えて殺そうとした。住持法泰尼はこれを養母大樹院に訴え、寛永二十年幕府が明成の領地を没収した事件である。この事件における法泰尼の態度は誠に立派であるが、法泰尼は黄梅院の古刹僧侶に参じたばかりでなく、沢庵に参禪しようとしたことがある(沢庵書状史料編三)三三〇位であるから、非凡な女性であったことは疑ない。

○秀頼の遺児園松(八才)は京都六条河原で斬殺されたが、女の子は七才で

この寺へいれられた。修行をおえた天秀尼がいよいよ住持となると、家康に「願いの筋があれば何でも申せ」といわれ、「開山以来の女人救済・

驅込みの寺法を永くお許しのほどを」と願ひ、許された。この「権現様のお声がかかり」が枷となって、「驅込みの寺法」は徳川期を通じて廃止されずにすんだ。

○覚山尼

北条時宗夫人。一〇才のとき、一一才の時宗に嫁いだ。いったん嫁入りしたあとは、いかなる理由があろうと離婚することができず、不幸な生涯をすごす女性の多いことに心をいためていた。こうした女性が助けを求めたとき、寺に三年間住みこませ仏事を修行させた。しかるのち離婚を認めるといふルールを時の執権・北条貞時が認めた。

○宝蔵

聖観音、初音菩薩、火取母、キリシタン聖餅箱(いずれも重要文化財)などが展示。聖観音はもと太平寺の本尊で、土紋装飾をほどこした末風の影響のつよい鎌倉後期の作品。聖餅箱のIHHSはイエズス会の章。

○墓所

西田幾多郎、和辻哲郎、高見順、安部能成、田村俊子などが眠る。

○鈴木大拙

この寺は鈴木大拙氏とも関係が深いことで知られている。中興・釈宗演禪師の弟子が大拙氏。

誓入女専用齋

誓入女及びその関係者は寺役所で取調をうけ、その間宿屋に泊る。はじめは専用の宿がなく文化頓「せんべい屋長右衛門」方が代用されているが、のち次第に専用化し、柏原・仙台屋・松本屋が御用宿となった。御用宿は誓入女に宿を貸したほか、調停を行っているし、手続や誓式を教え、また時には代書をしている。

飛脚門番

このほか飛脚・門番等があるが、信州・常州へ使する飛脚は大変であつたらうし、又門番も、表門は駿府の城門を移し、明六つより暮六つ迄が門限で、男子禁制、誓入女は当寺の表門までたどりつき、あと一歩の処で追手に捕らうとするときは、櫛・笄或は下駄など身につけたものを門内に投込めば寺に入ったものと見做され、追手を逃れ得たと、俗にいい伝えられるから、門番の役も他と異り一役であつたらうと、禅定師は述べておられる。

祠堂金貸付

松岡貸附所

東慶寺には、天保五年に出願して許可となつた祠堂金貸付のことがある。これは、江戸と鎌倉二ヶ所に貸附所を設けて、その利潤を寺法執行の備金にするものである。当寺所蔵の文書によると、慶応三年の貸附金現在高は一七九六両であつて、相当な金額であつたことがわかる。明治維新と共にこれは廃止となつた。

○後北条氏が鎌倉を支配した16世紀はじめ頃は建長・円覚・東慶を鎌倉三ヶ寺とよんでいる。

「まあ、いいじゃないか。とにもかくにも、つかまりもせず念願の東慶寺へ入ったんだ。御奉書はもう出たんだらう」

「御奉書とは東慶寺から、女の親元及び夫、双方に、女を寺であずかったことをしらせる書状だった。昔は夫にだけこれを送って、

「その方の妻にまぎれないなら、離婚し、以来どこへ再婚してもかまわぬという離婚状一札出してつかわせ」

とかなり強圧的に離婚させることを目的とした奉書だったらしい。更にこれが元禄以前ともなると、東慶寺に入っただけで即離婚となった。それだけ寺の権威が強かったわけだ。

それが寛保二年（一七四二）の公事方御定書の制定以来、内容に微妙な変化が現れた。これは強圧的に離婚させるという色合いを減らして、寺であずかっているという通達の方に重点が置かれ、夫に離婚状を出してはどうかとすすめる、或は説得する姿勢を示すにどまっている。現代の家庭裁判所の役割に似ているといっている。つまりは一種の調停機関である。

それだけ駆込寺の力が弱くなったということだ。そしてそれが幕府の基本的な方針であり、姿勢だった。

中世にあった「公界」、権力不入の地であり、罪人もそこに入れれば罪を追及されることなく、復讐の手ものがけられるアジール（隠れ家）であり、一切の租税を免除された自由の土地。封建領主にとって、これほど頭の痛い存在はなかった。戦国から近世にかけて、あらゆる領主がこの問題と戦い、少しずつ少しずつ、抹殺して来たのである。

駆込寺はまさにこの古い「公界」の一種だったのである。

「文吉がもう出かけました」

八兵衛が答えた。

この御奉書を届けるために、東慶寺の寺役所には数人の飛脚が常在している。文吉はその一人だった。

飛脚はどんな遠方の地でも御奉書を届けに行く。しかも事は急を要する。大体は先ず名主方に行つて請書を買ひ、里方、亭主方、仲人方と廻つて帰る。時には女の親や亭主同道で帰ることもあり、駆込女を送り届けることさえある。仲々大変な仕事だった。尚、この飛脚の費用は、受けた方で支払うきまりだった。

うめの草履が、石段の下から三段目に落ちている。

「草履がなんだってんだ!」

「松ヶ岡へ来て、そんなことも知らないのかい。このお寺ではね、草履一つ、替一本、石段の上に投げあげれば、それだけで駆込んだことになるんだよ。駆込んだ女はお寺のもんだ。娑婆の、それも男が、どうこうすることは出来ないのさ」

淨智寺

山の内にある。山号は金峰山といひ、臨濟宗円覚寺派に属する。寺伝によれば開山は元庵普寧、請待開山は大休正念、淨開山は南洲宏海、開基は北条時頼の子宗政、及びその子師時と伝ふる。師時は貞時について第十代執權となった人である。

元庵普寧は宋国西蜀の人、建康の蔣山で鏡鑑道沖に師事し、四明の智王山では無準師範の下にあって得悟した。宋が蒙古に攻められ寺院も多く侵されたので、文應元年（三三〇）渡海して來朝した。東福寺の円爾が京を迎えたが、時頼の招聘により鎌倉に來て建長寺にいた。（建長寺の項参照）

普寧が日本を去ったのは文永二年（一二九三）であるからこの間僅か五年しかいなかったわけである。時頼は弘長三年（一二四三）に死んでいるが、その後普寧はしばしば賀茂の正伝寺の東庵普寧に書を送って辭意を融していった。普寧は、時頼の死後鎌倉にまことに佛法を信する者なく、時宗はなお幼少である。時宗の大名も普寧に心を寄せた。外護者達の奔附した余信に封印し、羅織に「此御書が羅織をみるべき者なし」と書き添えて逃げるようにして鎌倉を去り京都に帰つてしまつた。その後間もなく普寧は日本を去るのであるが、この普寧の帰国は大覚派との軋轢によるもので、問津の疑をうけたというのもそれが原因で中絶されたものであるといふ。

- 甘露の井 鎌倉十井のひとつ
- 鎌倉七福神の布袋尊
- 木造三世仏坐像
- 阿弥陀、釈迦、弥勒の各如来は過去、現在、未来を表している
- 地藏菩薩坐像は重要文化財

弘安四年（二二八）八月七日に執權時宗の弟

北条宗政が二十九歳で没してこの淨智寺谷の奥で茶毘して埋葬し淨智寺が創建された。この時は宗政の子の師時とする。

時宗三十一歳。

淨智という寺名が最初に出るのは大休正念の寄福寺語録の中の弘安四年の年末の部の「為宏海首座檀那の請を受けて淨智に住する上堂」である。師時はのちに執權となり、応長元年（三三二）九月二十二日、三十九歳で死去しているからこの時はまだ八歳、おそらくは時宗が檀那であつたらう。時宗と宗政とは二つちがいの兄弟であり、母はともに北条重時の女である。兄弟は仲がよかつたので、若死した弟のために幼い遺児を守つてその菩提のために伽藍の造営に尽力したであらう。

この宏海首座とは南洲宏海、早く出家し來朝した元庵普寧に參じて大いに器許され、のち入木し、淨慈寺に掛搭し、更に諸寺を遊方し、帰朝の後、大休正念に随侍し鍾愛された。弘安四年年末に檀那の請を受けて淨智寺に住した。この尊崇して開山と仰ぎ自らは準開山となつた。

明月院 附最明寺・禪興寺

山ノ内、淨智寺の向いの谷にあり、この谷を明月谷という。開基は上杉憲方、開山は密宗守徹。もと禪興寺の塔頭である。明月院ははじめ禪興寺の塔頭として成立したものであるから、禪興寺はいま廃寺となつてゐるが、叙述の都合上禪興寺を先にのべる。さらに禪興寺は時頼の建立した最明寺が廢寺となつてゐたのを時宗が再興したものである。最明寺まで溯つて書き起さなければならぬ。

最明寺

北条時頼は山ノ内に邸宅をもつていた(吾妻鏡)建長六年(月未詳)。この場所はいま最明寺址と伝える。明月谷の奥であるという。最明寺は時頼によつてその名の傍にたてられたものであるが、康元元年七月にはじめて將軍家尊親王をむかへて礼仏のことがあり、十一月二十三日に時頼はここで落筋(年三〇歳)日來の落筋をとげた。戒師は關溪道隆であつた。(吾妻鏡)

明月院

開基は上杉憲方、開山は密宗守徹である。永徳三年(元念)足利氏詢から憲方にあてた書状その他(史料)によつて山内庄清瀬郷及び常陸國南太庄内古來その他二郷が憲方から明月院によせられてゐることがわかる。又永定、慈基の時に新たに上野・武蔵の中に地を寄せられてゐる(上杉憲定遺状史料)三〇三三七、附慈基遺状、三〇三三八。上記の古函には仏殿らしい建物の面翼に廊下によつて仏殿と結ばれた各一箇づつの建物があり相稱をなしている。そのほかに三つの附属建造物と前面に門と石塀がみえる。

山内上杉氏は戦國時代にいたるまで盛んであつたし、明月院の所領は關東にかざられてゐるから、かなり後までその年貢が絶えることはなかつたと思われる。一方憲方の菩提を弔うために大石大炊助が建てた武蔵國足立郡の妙薬寺もはやく応永十二年(三三)に明月院の末寺となつた。(志願社文史料)三〇三八七

- 第五代執権の北条時頼の墓
- 瓶(つるべ)の井 鎌倉十井のひとつ
- 本尊は如意輪觀世音菩薩。那須与一の守り本尊であつたと伝えられている。
- 木造上杉重房坐像は重要文化財
- やぐらは鎌倉市内に現存のものうち最大級。中央は上杉憲方の宝篋印塔
- もとは平治の乱で戦死した北條倉の豪族・首藤俊通の菩提供養のため、首藤経俊がつくつた
- なんととっても「あじさい寺」

建長寺

巨福山建長興禪寺。開山は關溪道隆、開基は北条時頼である。小袋坂の北側に勝上橋に向つて北東に切れ込む谷にあつて、南西に面してゐる。臨濟宗建長寺派の本山である。

巨福山の号は巨福邑(小袋)の地名にと、たもの、建長寺のある谷はその開海以前地獄谷といつて犯罪人の処刑場であつたと伝える。

ここが地獄場であつた頃一寺の寺院があり、御座山(山)寺と号した。後廢寺となつて地獄谷だけが残つてゐたのを、建長元年に北条時頼がその地をひらいて建長寺を創建するために小袋坂に移したといふ。鎌倉志(風土記)は「鎌倉大日記」に「建長元年小袋坂地獄谷建立」とあるのがこれであると述べてゐる。建長寺殿内古格圖(建長六年御座山御座山御座山と伝える。後志)に御座山より奥の西側内近く「地獄谷埋蔵」と記した所がある。又上の地獄谷は「東海法箱」の後に掲げる英門(御座山)の前の道に巨福路坂にかかる平前に之が面してゐる。この空は巨福邑坂新道開通までであつたといふが、今はなく、その本尊といふ地獄谷菩薩像が建長寺の仏殿内に安置してある。また別に俗伝には、時頼の時代に南左衛門尉といふ者が罪によつてここで斬らうとした時、大刀が折れて切ることができなかつた。彼の壁の中に葬する一十八分の地獄のためであつたので、これを寄つて別を許された。この小像は心平寺の地獄の原中に納めた。後、当寺創建の時上段本尊の胎内に移したといふ。現在別安置されてゐる。この地獄を俗に寄田地獄といふ。

上の古格圖を看ると、勝上橋の地獄堂、わめき土庫、原山地獄殿の地獄にちなむものが多い。また「鎌倉志」・「風土記」の伝える七月十五日の地獄鬼の行事は、それによつて傳説は倍するに足らぬが、地獄鬼自体は「鎌倉年中行事」(安徳三郎)まで遡ることができると、古い行事である事がわかる。参考まで提原施徳鬼の伝説を記しておく。昔御座山大徳禪師在世のとき、武者一騎来て、山門の下で行われる地獄堂会がもう終つてゐるのを見て、残念そうに別謝してゐた。時に大徳禪師がその符箓を見て呼びかえさせてもう一度施徳鬼会を設けて照問させたところ、その武者は、自分は提原施徳の靈であると告げて感謝して去つてゐた。開基時では毎年七月地獄鬼を終了後提原施徳鬼といふ行事が行はれてゐたといふ。(鎌倉志)

本尊は伝行作丈六の地獄菩薩像。大高、朱服の蓮華座の上に結跏趺坐し、裾を左右に垂らした鍍金地方に多い宋朝彫刻の雜作。仏像が小さいので天井につかえるような巨像である。堂内には他に尺余の子地獄菩薩及びもと心平寺にあつたといふ地獄尊を安置する。

關溪道隆は宋國西蜀の人。成都の大慈寺に於て得度し、諸師を巡回して慈通師範・龍池道沖・北山居簡等の諸老についたが、得地なく、最後に無明慧性について悟を開いた。道隆は在宋の頃日本僧景福寺來迎院院主月輪智鏡に遭つてこの人から日本の事情を聞き、夙より彼日の志があつたといふ。寛元四年(二二)來朝、來迎院に寓した。智鏡は厚く之を遇し、鎌倉に赴くことを勧めた。道隆は鎌倉に來て対福寺に入つたが、時頼はここから常樂寺に移した。常樂寺と道隆の關係については常樂寺の項に述べるが、建長元年(三三)建長寺建立事始(翌二年開等)による。吾妻鏡は三年とす、同五年十一月に竣工して時頼は道隆を開山にした。山号及び本尊については前述したが、寺名は年号にとり、建立の趣旨は上皇帝の方歳を祈り、將軍及び重臣の千秋、天下の泰平を願ひ、下は三代の將軍、二位家(政)及び一門の冥福を弔うといふものである。(吾妻鏡)

○ビヤクシン 高さ一三メートル。樹齡約七三〇年

○山門

狸の山門といわれる。山門再建の寄付を集めるため全国に派遣された靈水の中に、建長寺の裏山に住む狸がいた。狸は多くの寄付を得たものの、掃り道で犬に噛み殺されてしまつた。僧たちはこの狸の志に報いるために、その金を山門再建の資金に加えたといふ。

補僧といえは容貌魁偉な巨漢、遠唐大師像を思い浮かべるが、この蘭溪道隆(一一二一—一一七八)は、細面で撫肩のじつに優男である。この男が三十三歳で北宋時頼の招きで宋の西蜀から来日し、鎌倉に厳格な宋禅を確立した。そして、建長寺を創建し鎌倉禅の中心となったとは信じられぬほどである。

すでに宋西や内附によって、禅密兼修のいわば和風の加持祈禱は京を中心に広まりはじめていたが、中国の官制禅林の軍隊のような規律に基づき、純粋禅を確立したのは道隆である。綱のように強く鞭のように鋭い禅風がこの頂相圖から伝わってくる。

禅では不立文字、以心伝心を本とするので、教えは師資相承マンツーマンとし、師の像を頂相と呼び、伝法印可の印として弟子に与える。弟子は忌日に初祖らしいの像を法堂にかけ供養した。この図でも曲泉に坐り、右手に巻杖を持った人物を通して、崇高な礼拝の対象となる禅の境地がみえてくる。人間とは人間以上の世界でしか真に出逢えないものであることが、しみじみ感じられる。(国宝、鎌倉時代、絹本着色、一〇五×四六センチ、鎌倉、建長寺蔵)



○第二世住持は兀庵普寧。

*「ゴテル」「ゴタゴタする」の語源か？

*地藏菩薩と僧とどちらがうえか？

○わが國で初めて「禪寺」と称した。山号は巨福呂坂にちなみ、寺号は元号に由来する。扁額「巨福山」は第十世住持の一山一寂の筆。巨の字に筆勢による一点を加えて「巨」とし百貫の価をそえたので、世に百貫点という。○ケンチン汁は建長汁？

開山史田道海との伝

道海は延慶三年に示寂す

建長三年管物房副主となり初江王像を造立す
延慶二年は延慶二年を延慶二年と改題す
こと六〇年

管物房副主大且那口口開五

円應寺は山井野見越岩にあり後藤圓移建す
海西に

開慶五條以下
俱生神はか

十王の脱

運慶作との脱
初江王は幸有の作

円應寺

山内小袞坂の上、建長寺の向い側にある。臨濟宗建長寺派に属する。十王堂ともい、開山は知覚禪師と伝える。(新編鎌倉志)知覚禪師といは浄智寺の桑田道海のことであるが、この人は延慶二年(一一二〇)正月に寂して、(延慶伝燈錄) 当寺の初江王胎内銘のつたえる造立年代建長三年からかなり隔っているの、この伝(開山知覚禪師脱)は無理なよりである。

この寺の初江王像の胎内銘によると、建長三年(一一三二)八月に善助房という人が願主となって仏師幸有が造立したことがわかる。(史料編三ノ一八七)もしこの初江王ははじめから円應寺(新原西慶堂)のものであったとすれば、建長三年は道隆数年の延慶二年を過ること六〇年に近く、それだけでも離れすぎているのに、(延慶伝燈錄)によれば道海は仏光(無字智元)の会下にあったというし、一方初江王造立の年は開運道隆を建長寺に迎えた建長五年よりも古い。

円應寺は「開慶年中行事」に「國王寺と号す」とあり、また、なによりもこの寺が「旅の新原開慶堂」(開運)であることが明かである。そうだとすれば上の初江王はこの堂のそもそものはじめから存在したかどうかはにわかには断せられないけれども、この初江王をもよめて地獄の十王像あつての開慶堂なのであるから、その点を尊重すれば、この堂の開創が建長年間のものであることは疑う必要はないであろう。従ってこれら像群を重んずれば、初江王像胎内銘の善助房及び大且那口口こそこの十王堂の開山、開基ということになる。

ところでこの堂に関する史料として、『文明明応年間開東禪林詩文集抄録』(史料編鎌倉所築寫本)の中に明応九年七月立秋日の荒居開慶堂円應寺修造勸進状という作者不明のものがあるが、これによるとはじめ開慶堂は山井野見越岩(相模風土記)逸文「万葉集」等にみえる。甘繩神明社背後の山か、にあり、尊氏がこれを「荒居鯨海」前、鶴岡(在後、右長谷十二面当途五攝、左市郎四ヶ町摩兒橋)という場所に移建したという。即ち海に面して建つていたことがわかる。

本尊は開慶大王坐像(重要文化財)でその胎内文書の上は上にのべた。この他に初江王(重要文化財)などの十王、及び俱生神(重要文化財)、響衣婆(胎内に永正十一年の記があるという)、鬼卒(重要美術品・主命鬼ともいふ)、人頭杖(重要美術品)等がある。

十王とは冥府に在つて亡者の罪業を裁く蔡宏王・初江王・宋帝王・五官王・閻魔王・東成王・太山王・平等王・都市王・五道輪王の一〇人の王である。亡者は七日毎に蔡宏王から太山王までの裁判を受け、さらに百ヶ日目に平等王、一年目に都市王、三年目に五道輪王の裁判をへて判決を下されると説く。これが十王思想であるが、鎌倉時代には地藏信仰と共に普及した。鎌倉にも円應寺の側に十王堂橋(十橋の二)というのがあるし、建長寺にはわめき十王というのがあったから、他にも十王をまつる堂のあったことが知られる。

寺伝にむかし運慶頓死して地獄に至り、直ちに閻魔王を見、蘇生して作ったというが説話としては平凡である。この話は上述勸進状にもみえて、しかし上述のように初江王は建長三年幸有(運慶)の系統をひいた鎌倉(開慶)の作であることがわかっている。又閻魔王・俱生神・鬼卒・人頭杖が鎌倉時代の作で他は新しいという。

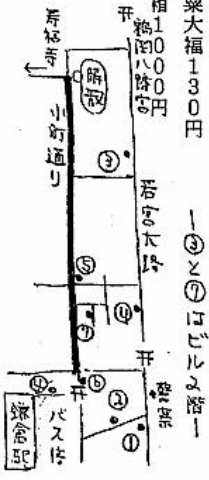
<十王像> 十王は冥界(仏の世界)にあって、死者の罪業を裁判する10人の王である。仏教では人間は三界(欲界・色界・無色界)と六道(地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上)に生死をくりかえす(輪廻転生)と考えるが、死者は冥界で順次10人の王の裁判を受け、ゆくべき世界が定まるとされる。その10人とは、秦広(江)王・初江王・宋帝王・五官王・閻魔王・變成王・太山王・平等王・都市王・五道転輪王である。この考えは中国の唐末ごろに成立し、平安後期の日本に伝わり、鎌倉時代で大流行した。十王が冠をつけ、道服を着て笏をもち、忿怒の姿を示すのは道教の影響が強いことを示している。閻魔王は地獄の王で、その妹を奪衣婆という。三途の川のほとりで人の衣をはぎ、樹上の懸衣翁にわたすという鬼女である。

やがて十王には本地仏がきまり、十三仏が成立して人々の救済にあたるとされた。これをその忌日と十王に配すると次のようになる。

- 不動明王(初七日 秦広王) 観世音菩薩(百ヶ日 平等王)
- 釈迦如来(二七日 初江王) 勢至菩薩(一周忌 都市王)
- 文殊菩薩(三七日 宋帝王) 阿弥陀如来(三回忌 五道転輪王)
- 普賢菩薩(四七日 五官王) 阿闍如来(七回忌 遊上王)
- 地藏菩薩(五七日 閻魔王) 大日如来(十三年 抜苦王)
- 弥勒菩薩(六七日 變成王) 虚空蔵菩薩(三十三年 慈恩王)
- 薬師如来(七七日 太山王)

○若い女性の雑誌「HANAKO」おすすめの小町通り・鎌倉みやげ

- ① 梅花はんべんと小判揚 井上蒲鉾店 梅花はんべん1枚130円
- ② 漬物 香寿庵 赤紫蘇茶漬け300円
- ③ ワッフル わっふる21 ワッフル250円
- ④ 鳩サブレ 豊島屋 鳩サブレ15枚430円
- ⑤ 押し寿司 味くら 鯖寿司1本900円
- ⑥ 粟大福と百味せんべい 長嶋屋 粟大福130円
- ⑦ 玉子焼 玉子焼おざわ 玉子焼1箱1000円



◎小町通りクイズⅡしっかり確かめてください

- ① 小町通り入り口の鳥居の上の額東には何と書いてありますか
- ② 小町通りにある橋の名前は何ですか

鶴岡八幡宮

御祭神 應神天皇 比賣神 神功皇后

鎮座地 神奈川県鎌倉市雪ノ下二丁目一番三十一号
例大祭 九月十五日

御由緒

建久二年十一月二十一日 丙寅 天晴 風静

鶴岡八幡宮並に若宮及び末社等遷宮なり。和田義盛・梶原景時等隨兵を率い、辻々並に宮中を警衛す。其の後頼朝(御束帯・帯剣)御参宮あり。北条義時御剣を持ち、御座の傍に候す。(中略)すでに殿内に遷し奉る。多好方、宮人曲を唱し、頗る神感の瑞相あり。

これは「吾妻鏡」に見える御遷宮の記事である。大臣山の中腹に始めて本宮が出来て、現在のような面目に改まったのはこの時、すなわち建久二年(一一九一)であった。明治以来、この十一月二十一日を当宮の御鎮座の日とし、太陽曆に換算した十二月十六日に、その記念祭を執行し、当時のままに「宮人曲」の御神樂を奉奏している。

しかし、鶴岡八幡宮の歴史は実際にはもっと古く、源頼義の事蹟から始まる。

頼義は康平六年(一〇六三)奥州を平定して鎌倉に帰り、源氏の氏神として、由比郷鶴岡の砂丘に八幡宮をお祀りした。この時丹塗弓・白羽矢など(現在国宝)を神殿に納めた。その子八幡太郎義家も深く尊崇して、社頭の修営につとめていた。このような父祖の縁故で治承四年(一一八〇)頼朝は鎌倉に進出すると、まずこの海浜の八幡宮を選擇し、家運の隆昌を祈り、神意を伺って現在の境内にこの宮を遷座した。これを鶴岡若宮と申した。

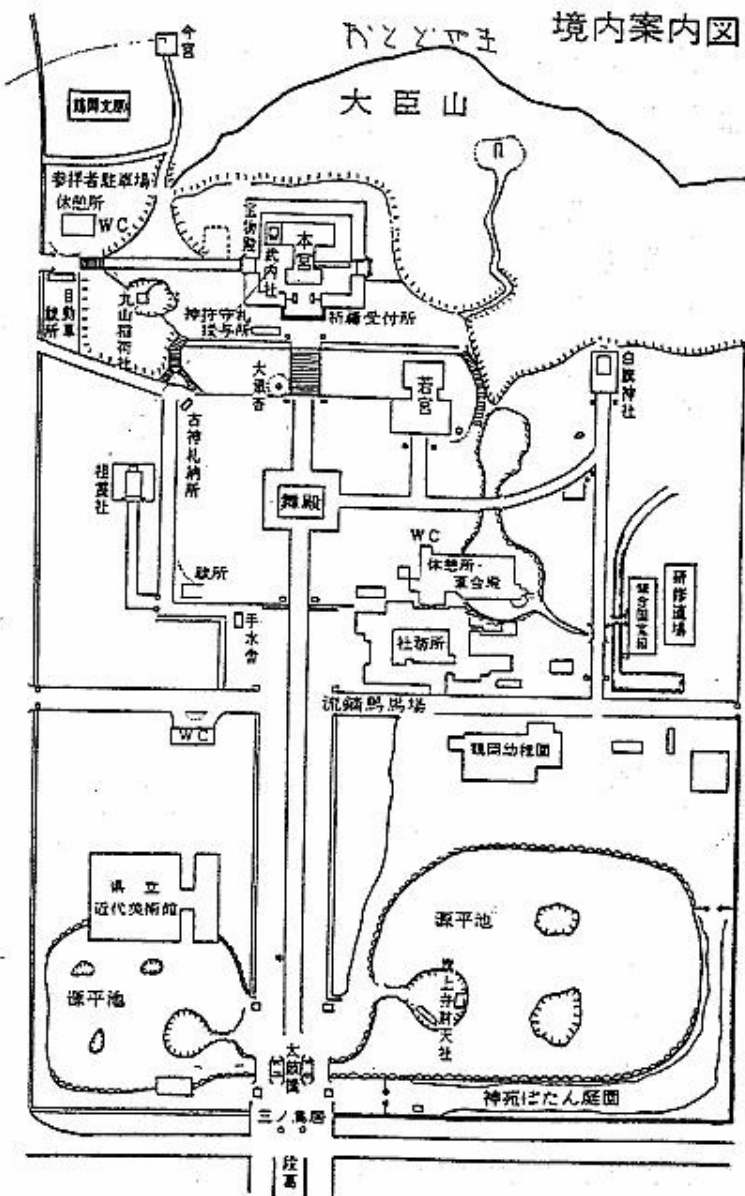
頼朝は自分の居所である幕府をこの若宮の東側に構えるほどに、この宮を関東の総鎮守として帰依の心を形にあらわした。だが、建久二年(一一九一)の三月、町屋から火災が起り、社殿も延焼した。頼朝は直ちに大臣山の中腹をけずり、前記の如く上宮を建てて本宮とし、従来の宮のところに下宮を建てて若宮とし、今日のように本宮、若宮を中心にした上下両宮の姿になったのである。当時の文化の粋を関東に移して成就した最初の大事業ともいふべきで、この時以来社頭は面目を一新した。頼朝はこのころすでに天下を治め、鎌倉は事実上京都に並んで政治の中心になっていた。そこで丹誠をこめて崇敬を厚くし、莊嚴を尽して國家の宗祀にふさわしく整えたのであった。

このように鶴岡八幡宮は長い歴史ののちに、源頼朝のなみなみならぬ真心によって完成されたのであるが、鎌倉が開けた時から、町の中心に心のより所として奉斎されていたわけである。

鶴岡八幡宮を京都の内裏と同じように仰ぎ、若宮大路を朱雀大路にならって社頭から真直ぐに海岸まで作った。これは表参道であるとともに京都へ向う東海道の基点となり、また、鎌倉の都市計画の基本線となった。

境内案内図

後鳥羽天皇の御宇に於て
境内案内



段葛 段葛。鎌倉のメインストリートト若宮大路の中央に二条の堤を築き、その基部に基石を敷いた参詣路。寿永元年（一二二）三月、頼朝が鎌倉の都市建設の第一歩として、あるいは政子の安産祈願をかねて造営した。「吾妻鏡」は頼朝自身が監督し、北条時政以下の諸将が土石を運んだと伝える。段葛という名称は江戸時代の記録からみえる俗称。置路ともいわれ、室町期には置石・作道などとも称した。段は壇であり、葛は壇などの上方にあって縁石を兼ねる石であるから、土壇の上に基石を敷いて造った道という意。特殊な形の置路は京都の大内裏陽明門などにもあったが、姿を消し、今では段葛がわが国唯一の置路の遺例となった。はじめ鶴岡八幡宮の社頭から由比ヶ浜まで造られたが、明応四年（一五七）八月の地震による洪水で破壊されたりして、幕末には下馬場までとなり、ついで明治十一年の官有地編入によって二の鳥居以南を失った。ことに明治二十二年の横須賀線の工事で著しく、その形を変えた。全長約五四〇メートル余。段葛（参道）は鶴岡八幡宮境内の一部である。（三浦）

橋の下の細い小路でつながっている池が源平池で、左(西側)が平家池、右手(東側)が源氏池と呼ばれている。平家池には平家の旗にちなんで蓮を、源氏池には同様白蓮を植えたというが、これは西国の平家、東国の源氏を意識してのものだろう。

平家池には池の面に乗り出すように近代美術館(昭和二十六年竣工)が建てられている。一方、源氏池に浮かぶ小島には旗揚げ弁天社がまつられている。

橋を渡って杉並木の参道を進くと、参道を左右に横切る一条の道がある。毎年九月十六日にここで流鏝馬の神事が行なわれるので、流鏝馬道と呼ばれるは、流鏝馬の馬場と呼ばれている。

静の舞い その先の一段高い庭にあがる、と中央に朱塗りの舞殿がある。源義経の愛妾静が舞ったというのがこの社殿で、下の宮あるいは若宮とも呼ばれている。

義経が兄頼朝の追及をうけて身をくらましたのち静が捕えられて鎌倉へ連れてこられたのは文治二年(一一八六)二月のことであった。この年四

月八日、頼朝は政子とともに八幡宮に参拝したが、その折に政子が、

「かの静という白拍子は今様の上手と聞きます。ぜひ見たいもの」

と所望した。静は再三ことわったが、とうとうことわりきれずに一曲舞うことを承知した。工藤祐経が鼓を打ち、畠山重忠が銅拍子をつとめる。

頼朝、政子夫妻をはじめ、あまたの御家人たちが見守るなかで静は、

吉野山峰の白雪踏み分けて
入りにし人のあとを恋しき

しづやしづしづのをだまきくり返し

昔を今になすよしもかな

と、吉野山で別れ別れになった義経への恋慕の情をこめて歌い、かつ舞った。その美しき、見事さに万擲は水を打ったように静まり返った。

ところが頼朝は、天下の罪人を臆面もなく恋う歌をうたうとは何事か、と怒った。それをなだめたのが政子であった。

「石橋山の戦で敗れたあなたが安房へ逃れられたとき、わたしはひとり涙に泣いていました。あのときのわたしの気持と、九郎殿を慕う静の気持に

どれだけの違いがありましよう」

そこで頼朝も機嫌をなおし、静に衣を与えてその舞いを賞したという。そのとき静が舞ったのがこの社殿だというのが、当時は石段上の社殿はまだ建てられておらず、現在の舞殿のあるところに本殿があったらしい。

鶴岡八幡宮本宮(上宮)・拝殿

祭神 応神天皇・仲哀天皇・神功皇后・比賣大神

一一九一(建久二年)に若宮八幡社が火災に遇って焼失したため新たに石清水八幡宮から御神体をお迎えして祀ったのが、この上宮で、若宮(下宮)とは祭神が異なっている。江戸時代までは「八幡宮上宮」と呼ばれていた社殿で、現在の社殿は一八四(文政十一)年に徳川幕府十一代目の将軍・徳川家斉が造営したものである。徳川家斉の権現造りで、社殿手前には左右に隨身像を置いた楼門があり、周圍に回廊をめぐらしている。

*鶴岡八幡宮宝物殿(回廊) なお、この回廊は現在、神輿など鶴岡八幡宮の数多くの社宝を陳列した宝物殿となっている。

丸山稲荷社

本殿西の山を丸山といい、その山の上、もと松ヶ岡明神という古社があった跡地にある稲荷社で、「流れ見世棚造り」の社殿は、室町時代中期の建造物で、鶴岡八幡宮境内の建造物の中で最も古く、「国指定重要文化財」になっている。

なお松ヶ岡明神は別名を「地主明神」という。それは鶴岡八幡宮上宮が建つ前は、ここ松ヶ岡に鎮座していた明神で、鶴岡八幡宮上宮にその地を譲ったところから来た名である。

若宮神社(下宮)

祭神 仁徳天皇・履仲天皇(宇治皇子)・仲媛命(久邇)・磐之媛命(宇邇)

(仁徳帝の皇子と姉妹)

本殿へ昇る石段の東にある神社で、一一八〇(治承四年)十月に源頼朝が、材木庵二丁目の元八幡を遷して、ここ鶴岡八幡宮の起こりとした神社で、そのときの社殿は一一八一(養和元年)に兵州浅草(東京都浅草)の工匠が招かれて建造したものだといふ。そのときの社殿には回廊があつて、一一八六(文治二年)四月八日、源頼朝と政子夫人は、この社に参詣して、この回廊から、神楽殿で舞う静御前を見物したと伝えられ、また一一八八(文治四年)二月二十八日の臨時の流鏑馬も、この回廊から見たと記録されている。現在の社殿は北条氏綱が再建した室町時代末期の様式を伝える権現造りの本殿・幣殿・拝殿がある。

白旗神社

祭神 源頼朝・住吉大神

若宮神社の東の社殿がそれで、頼朝の木像を祀っており、頼朝の子で鎌倉幕府二代将軍を継いだ頼家の創建である。

一一九〇(文正十一年)七月に豊臣秀吉が鶴岡八幡宮に参詣したとき、この神社に参拝し、頼朝の木像の肩をたたいて「天下ヲ奉ニ握リシハ足下ト我レトノミ、足下ト我レトハ天下ノ友タリ」と云ったという逸話が伝えられている。

*源実朝と、その歌碑 鎌倉国三館の南に一つの歌碑がたつている。源実朝の生誕七五〇年を記念して一九四二(昭和一七年)八月に、鎌倉ペンクラブの人びとが建てたもので、次の歌が刻んである。文字は、藤原定家が筆写した実朝の歌集「金槐和歌集」から取ったものである。

山はさけうみはあせなむ世なりとも

君にふた心われあらめやも

源実朝は幼名を千幡といい、源頼朝が征夷大将軍になった一
か月後の一一九二(建久三年)八月九日に、將軍の次男として生
まれ、兄の頼朝が一一〇三(建仁三年)九月に修善寺に幽閉され
たあとを承けて鎌倉幕府三代將軍になった。ところが政治の突
権が北条氏にあったため文の道を選び、『新古今和歌集』の撰者
藤原定家と親交を深めて和歌の道に励み、一一二二(建保三年)
に『金槐和歌集』を著している。年わずかに二二歳のことであ
る。このように公家(貴族)の氣風を志向して官位を望み、右大臣
にまで昇進したが、それを大江広元に諫められると、日本での
生活を諦めて中国大陸への渡航を計画し、宋の陳和卿を鎌倉に
招いて一一二六(建保四年)一月に由比ヶ浜で大船の建造に着
手した。しかし此の海岸が遠浅だったため大船を浮かばせる工
夫が着かず、翌年四月、ついに断念した。鶴岡八幡宮での実朝
の不幸の死は、じつに、その二〇カ月後のことである。

鎌倉国宝館(鶴岡八幡宮境内)

鶴岡八幡宮社務所の東側、白旗神社の南側にある建物がそれ
で、鉄筋コンクリートではあるが宗長の正倉院を模した「校倉
造り」である。一九二二(大正十一年)九月一日の関東大震災で鎌
倉の多くの寺社が損壊し、貴重な文化財が損失・損傷したので、
各寺社と市民の要望で鎌倉市内の寺三社堂の文化財を保護保存
するため一九二八(昭和三年)に建てられた。

旗上弁天

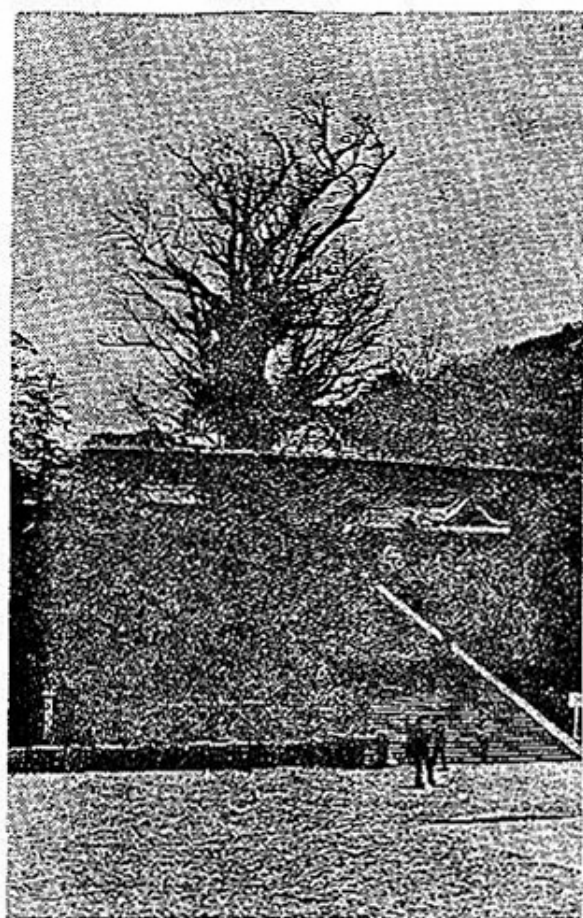
源氏池の中の島にある弁天で、一一八一(養和元年)年に、この
地に祀られたというから源頼朝が鎌倉に入ってから間もなくの祭祠
である。ここの「辨財天坐像(現・鎌倉国宝館像)」画像・木像と
もに日本の辨財天を代表するもので、インドの河の女神サラス
ヴァティーが日本に伝えられて市寸馬比賣(宗像の三姫神)と習
合し琵琶を弾く美女像となった典型的なもの。木像は鎌倉時代

の仏師・運慶作のもので、膝にのせている琵琶は、もと平ノ重
盛のものだったと『新編相模風土記稿』は伝えている。神仏混
淆の祠宮であったため明治維新で一時無くなっていたが、のち
再興された。なお旗上弁天の由来は、承久の家のとき社前で京
に向かう兵が出陣の旗上げをしたためだという。

鉄の井 さきに鶴ヶ岡八幡宮から若宮大路を境
にして東側を歩いたが、今度は西側を巡ってみる
ことにしよう。

八幡宮の三の鳥居を西へ行くと、北鎌倉から来
る道が小町通りに入る丁字路にぶつかる。その角
に鎌倉十井の一、鉄の井の跡がある。むかし、こ
の井戸の中から鉄の観音の首が掘り出されたとい
うから、この名があるという。『吾妻鑑』による
と正嘉二年(一二五八)正月十七日、秋田城介泰
盛の甘縄の屋敷から出火し、南風にあおられた火
は薬師堂の裏山を越えて寿福寺のあたりまで焼き
尽したという。この観音像はその折りの火災で土
中に埋れていたものが掘り出されたのではないか
とされている。

承久元年（一一一九）一月二十七日、三代將軍実朝の右大臣拝賀の礼が神殿で行なわれた。あいにくこの日は、積雪二尺という悪天候になった。暮れやすい冬のそれも夜になって退出、下までわずか十数段の石段を残すところまで来たそのとき、うしろ袢たもとを頭から被った阿闍梨公暁が、このイチョウの蔭からおどりでて実朝を刺殺し、首を刎ねた。公暁は俗名善哉といい、祖母北条政子のために伊豆に幽閉され、修善寺で謀殺された二代將軍頼家の子、そしてその政子のはからいで建保五年（一一二七年）六月二十日、八幡宮別当に任ぜられたまだ十八歳の少年であった。



鶴岡八幡宮の大銀杏

公暁はただちに後見人である備中阿闍梨の雪の下の北谷の住坊におもむく。そこで三浦義村に使いを出して自分を將軍にするよう取り計らえと伝えた。ところが北条義時は、義村に逆に処分を命じた。義村の使いが遅いので、公暁は鶴岡八幡宮寺の後の山に登って、三浦義村屋敷に行こうとしたところで、長尾定景の手

にかかり殺された。

これで鎌倉源氏の正統はわずか三代・二十七年（頼朝が鎌倉入りをしてから三十九年）でまったく断絶した。それも最後の源氏を源氏みずからの手であやめ、権謀術数の畷におちて滅びてい

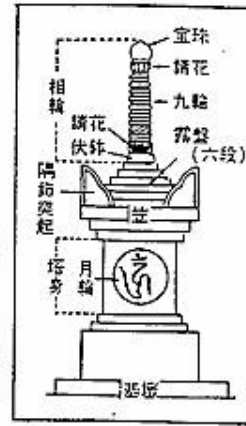
った。北条氏が心底深く謀っていた北条時代が、名実ともものものになった。八幡宮寺もまた北条氏との関係を深めていく。

暗殺の怪

ところがこのときの状況を、別に説明するものに、つぎのようなものがある。公暁は衆にすぐれた武芸者であったというが、当日は鎧々たる武将三十名が随行者とあり、正月拝賀のため、すべて武装はしていなかったといっても、公暁ひとりを防ぎ止められなかったものか。また一千余名の武装警護が配置についていたといわれるが、だれも手をだしていなかった。まして公暁は首をもって、逃げこんだ先でゆうゆう晩食をとっている。追手は各所を探りまわったあげく、ようやく居所をつきとめた。召し捕りにゆくと、そこで公暁に加担する僧たちと一戦を交える。ここでも公暁は逃げてしまう。それからまたあちこちを探す。やがて公暁の外出をねらい、ようやく討ちとっている。だがこれよりさき、夷朝を倒す祈願に八幡宮へ千日参籠をさせたり、別当の身で刀をさげた怪行動が許されたり、それに凶変でこったがえす石段で、武芸者といっても公暁ひとりで夷朝の首を刎ね、しかも持ち逃げすることが可能だったかどうか。まして公暁逮捕に、わずかに二キロ程度の行動範囲の鎌倉市内で、長時間をかけている。こうしてあれこれみても、公暁のこの行動の裏には、黒幕の大物が策略をめぐらしていたことも考えられてくる。そこで公暁召し捕りも相手方との政治的折衝などで手間どった、と見るべきであろう、というのである。

しかし、公暁がイチョウの蔭にかくれて……という物語の記述は、江戸時代にはいつてからはじめて現われてくることであって、あるいはこれは劇的効果をねらった後世の脚色ではあるまいか、ともいわれる。

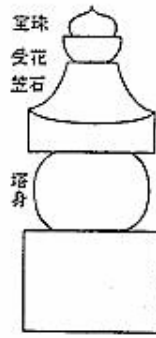
宝篋印塔



宝篋印塔の各部名称

塔身に輪郭をつけ、基礎の下にはっきりした「反花座」を加えるのが関東型の特徴。また、古いものほど、隅飾突起が直立。伏鉢がちいさい。

五輪塔



梵字	五大	形式	梵名	字義	五大
𑖀𑖡𑖛𑖜𑖞𑖟𑖠𑖡𑖢𑖣𑖤𑖥𑖦𑖧𑖨𑖩𑖪𑖫𑖬𑖭𑖮𑖯𑖰𑖱𑖲𑖳𑖴𑖵𑖶𑖷𑖸𑖹𑖺𑖻𑖼𑖽𑖾𑖿	空輪 風輪	円 半月	キヤ カ	虚空 空	土用 冬
	火輪	三角	ラ	炬 燭	夏
	水輪	円	バ	言 説	秋
	地輪	方	ア	不 生	春

五輪塔各部名称と意味

縦長の地輪。江戸時代は突き出た空輪。反り極端な火輪。縦長の地輪。

過去現在未来にわたる諸仏の全身舍利を奉蔵するために「宝篋印陀羅尼經」を納めた供養塔。鎌倉中期から造立。

地・水・火・風・空・

の五大を宇宙の生成要素と説く仏教思想に基づいて平安時代に創始。平安時代は傾斜のない火輪。樽型に近い水輪。樽型の地輪。

鎌倉時代は四隅を直線で切る火輪。球型の水輪。方に近い地輪。室町時代は反り四隅を斜線で切る火輪。

鎌倉

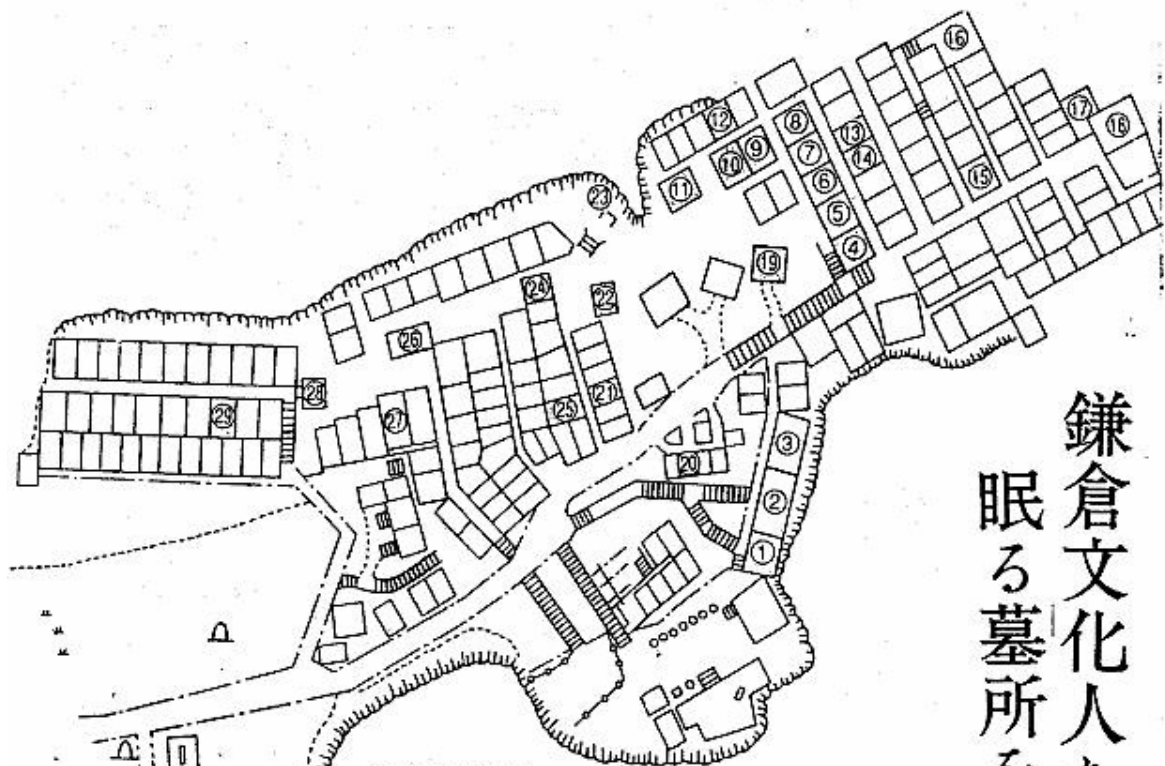
- 一 七里が浜のいそ伝い 稲村崎
名将の 剣投ぜし古戦場
- 七 歴史は長し七百年 興亡すべて
ゆめに似て 英雄墓はこけむしぬ
- 八 建長・円覚古寺の 山門高き松風に
昔の音やこもるらん

東海道

- 一 汽笛一声新橋を はや我汽車は離れたり
愛宕の山に入りのこる 月を旅路の友として
- 六 横須賀ゆきは乗換と 呼ばれておるる大船の
つぎは鎌倉鶴が岡 源氏の古跡や尋ね見ん
- 九 北は円覚建長寺・南は大仏星月夜
片瀬腰越江の島も ただ半日の道ぞかし

(大和田建樹作歌「鉄道唱歌」 明治33年刊)

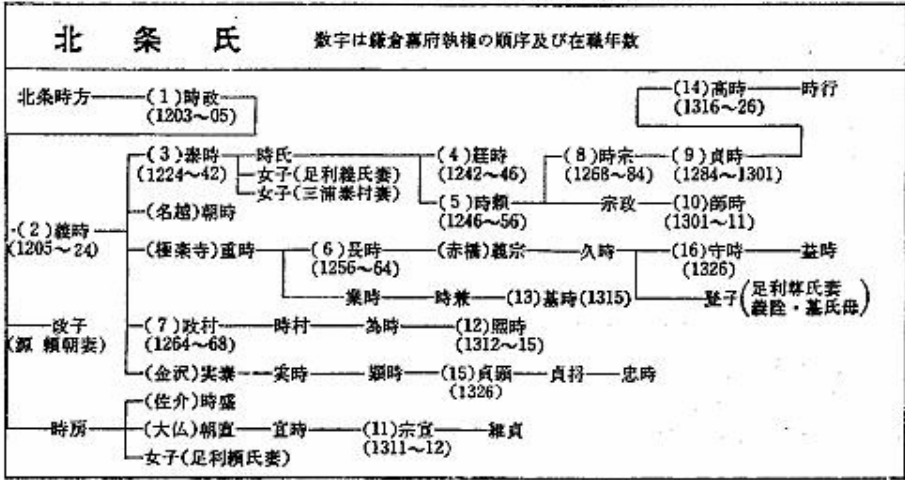
鎌倉文化人たちが 眠る墓所を巡る



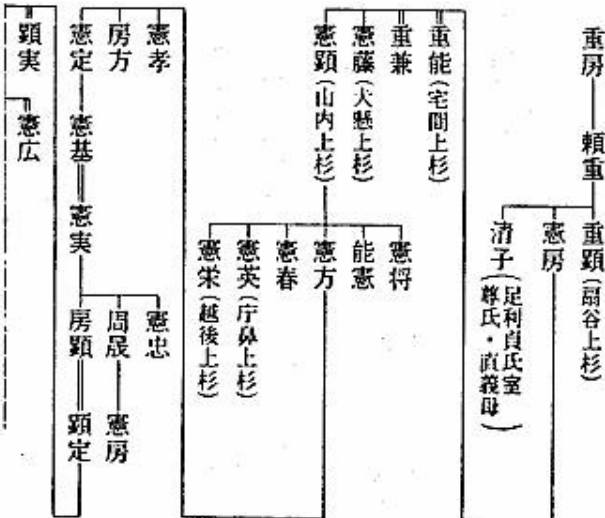
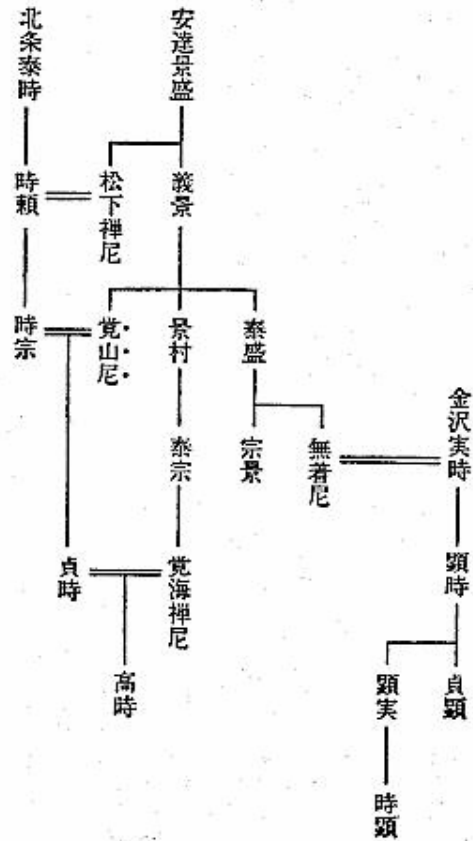
東慶寺墓域地図

- | | | |
|---------|---------|----------|
| ① 石井光雄 | ⑪ 出光佐三 | ⑲ 前田すゑ |
| ② 野田卯太郎 | ⑫ 谷川徹三 | ⑳ 前田村俊子 |
| ③ 松野鶴平 | ⑬ 石川謙 | ㉑ 三枝博音 |
| ④ 岩波茂雄 | ⑭ 高木惣吉 | ㉒ 前田青郵筆塚 |
| ⑤ 西田幾多郎 | ⑮ 太田水穂 | ㉓ 佐々木房 |
| ⑥ 安倍能成 | ⑯ 四賀光子 | ㉔ 真杉静枝 |
| ⑦ 野村洋三 | ⑰ 高見順 | ㉕ 川田順 |
| ⑧ 野上豊一郎 | ⑱ 佐々木茂索 | ㉖ 東畑精一 |
| ⑨ 野上弥生子 | ⑳ 向陵塚 | ㉗ 小林秀雄 |
| ⑩ 安宅弥吉 | ㉑ 和辻哲郎 | ㉘ 中川善之助 |
| ㉒ 鈴木大拙 | ㉓ 前田香軒 | |

しやくそうえん 釈宗演 一八五九—一九一九 明治・大正時代の臨済宗の僧侶。安政六年（一八五九）十二月十八日、若狭国大飯郡高浜村に一ノ瀬信典の次男として生まれる。十三歳で越後守謙について出家得度、名を祖光のち宗演と改め、釈を氏とする。儀山善来・今北洪川に参禅し、洪川の法を嗣いで洪岳の道号を受ける。楞伽窟と称した。慶応義塾に学び、明治二十年（一八八七）卒業、セイロンに留学。帰国してのち円覚寺・建長寺の管長となる。その間、明治二十六年シカゴにおける万国宗教大会に出席し、あるいは満洲・欧米・インドに赴く。その門下に帰依するもの少なくなかった。大正三年（一九一四）臨済宗大学の学長となる。同八年（一九一九）十一月一日寂。六十一歳。中興開山となった東慶寺に葬る。『釈宗演全集』全十巻（昭和四年（一九一九）—五年）がある。



覚山尼関係系図



参考図書

○鎌倉市史・社寺編 鎌倉市史編さん員会編 S34・10 鎌倉市刊

○鎌倉の歴史の散歩道 安西篤子監修 93・5 講談社刊

○鎌倉に異国を歩く 石井 喬著 94・10 大月書店刊

○もうひとつの鎌倉 石井 進著 83・7 そしえて刊

○鎌倉散歩24コース 銅鼓銅鞮編 93・12 山川出版社刊

○神奈川県歴史散歩 銅鼓銅鞮編 90・10 山川出版社刊

○知られざる鎌倉 沢 寿郎著 H1・3 鎌倉朝日刊

○交通公社のポケットガイド 鎌倉 S60・1 日本交通公社出版事業局刊

○歴史と旅 鎌倉の史話5〇選 S59・4 秋田書店刊

○騎跡 日本の歴史6 鎌倉編と 鎌倉編 S61・3 ぎょうせい刊

○駒込寺蔭始末 隆慶一郎著 90・2 光文社刊

○国宝大辞典 4 工芸・考古 北村哲郎編 S61・1 講談社刊

○歴史散歩事典 井上光貞監修 85・8 山川出版社刊

○大系日本の歴史 5 鎌倉と京 五味文彦著 88・5 小学館刊

○北条政子 永井道子著 90・3 文芸春秋刊

エチケット守って、きょう一日をさらに楽しく！

◎電車の座席は譲りあって一人でも多く座れるようにご協力ください。

◎道路は史跡めぐりの専用道路ではありません。

地元の方の生活の邪魔にならないように！

◎史跡めぐりは「団体行動」です。ムードにひたりながら、ゆっくりとお歩きになりたいお気持ちもわかりますが、今日は「みんなのペース」にあわせてください。わがまま歩きは、お友達と次の機会に！

◎ご集印も「団体行動」のときはご遠慮ください。

◎ごみは「ごみ入れ」にきれいでください。ご自分でお持ち帰りください。